

早稲田大学環境総合研究センター(WERI)
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

第 15 回ふくしま学(楽)会・第 3 回 1F 再生塾

ふく福島復興の過去・現在・未来:

我々は何処から来たのか、

我々は何者か、

我々は何処へ行くの

報告書

日 時: 2025 年 1 月 26 日 13:00-18:00
会 場: ふたば未来学園中学校・高等学校(福島県広野町)+Zoom ミーティング
参 加: 89 名(会場参加 66 名、オンライン参加 23 名)
主 催: 早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター
早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI)
共 催: 福島県広野町、富岡町、ふたば未来学園中学校・高等学校
後 援: 福島イノベーション・コースト構想推進機構、双葉地方町村会
早稲田大学アジア太平洋研究センター(WIAPS)
早稲田大学環境総合研究センター(WERI)

2025 年 4 月 16 日

<プログラム>

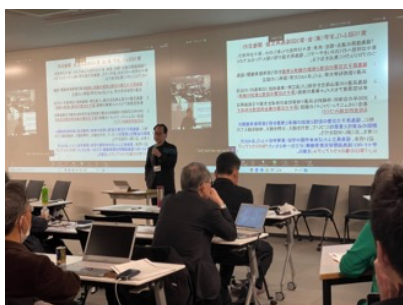
総合司会

小磯匡大（1F 地域塾・副塾頭、福島県立ふたば未来学園・教諭）

13:00-13:10:開会にあたって

松岡俊二（福島再生塾・塾頭、

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・センター長）



13:10-13:30:開会挨拶

遠藤 智（福島県広野町・町長）

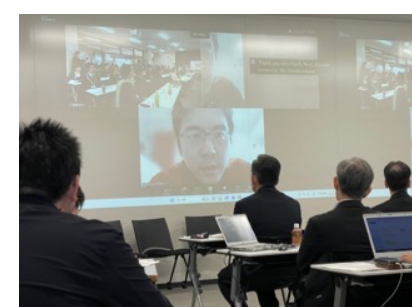
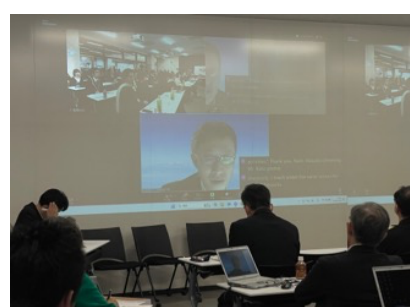
竹原信也（福島県富岡町・副町長）

新保隆志（福島県大熊町・副町長）

郡司 完（福島県立ふたば未来学園・校長）

加藤篤史（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・研究科長）

小野田弘士（早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科・研究科長）



報告とパネル・ディスカッション: 13:40 -15:20

テーマ: 福島復興の過去・現在・未来: 我々は何処から来たのか、我々は何者か、我々は何処へ行くのか

報告: 13:40-14:10

1. 福島原子力災害を踏まえ、科学技術と社会の持続可能な関係を築く高等教育機関の創設を考える

竹原信也（福島再生塾・運営委員、福島県富岡町・副町長）

2. 津島地区(浪江町)の住民参加型環境アセスメントから、福島浜通りの里山再生を考える

林 誠二（福島再生塾・副塾頭、国立環境研究所福島拠点・研究グループ長）

3. 2050 年の持続的浜通り地域社会の形成を支える福島再生基金の創設を考える

崎田裕子（1F 地域塾・副塾頭、環境ジャーナリスト）



パネル・ディスカッション: 14:10-15:20

福島原子力災害の記憶と教訓の継承と発展を担う高等教育機関の創設を考える

パネル司会:

森口祐一（1F 地域塾・副塾頭、国立環境研究所・理事）

パネリスト:

菅波香織（未来会議・事務局長、弁護士）

安東量子（福島ダイアログ・理事長）

猿田和孝（秋田県五城目町教育委員会・主査）

工藤尚悟（国際教養大学国際教養学部・准教授）

霜村康仁（福島県立ふたば未来学園・高校 2 年）

佐々木一慧（福島県立ふたば未来学園・中学 3 年）

Zoe Decarpentrie（ブリュッセル自由大学（ULB）修士 2 年）

佐々木京香（早稲田大学教育学部 4 年）

本多修造（早稲田大学創造理工学部 3 年）



(休憩 : 15:20-15:30)

15:30-16:40: 少人数グループによる「対話の場」(会場参加者のみ)

(休憩 : 16:40-16:50)

16:50-17:40: 全体会

全体会司会:

井上 正 (1F 地域塾・副塾頭、電力中央研究所・名誉研究アドバイザー)



17:40-17:50: 閉会挨拶

松岡俊二 (福島再生塾・塾頭、1F 地域塾・塾頭、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授)

【パネル・ディスカッション】

司会: 森口祐一 (1F 地域塾・副塾頭、国立環境研究所・理事)

菅波: 今日の松岡さんの「学びが楽しくなくなる日本の教育は残念」という言葉には共感する。子育てをしながら、子どもの友人たちの話を聞く中でも強く感じる。学びは本来楽しいものだと思うし、ここに集まっている方々も同じ思いを持っているのではないかな。

福島県浜通り地域の教育にはまだ管理的な側面が残っているが、大熊町の「学び舎夢の森」では南郷先生が子ども主体の学びを大切にし、遊びを通じた学びを実践している点が素晴らしいと感じている。

また、学びの楽しさを伝えるには、頭の固い大人世代だけでは限界がある。子ども基本法が制定され、子どもの意見表明や参画が重視される中で、若い世代の意見をぜひ聞き、学びたいと考えている。

猿田：秋田県五城目町教育委員会の職員で、教員ではなく一般の地方公務員として働いている。五城目小学校は改築をめぐる住民との話し合いが注目された学校であり、現在は「みんなの学校」という社会教育事業が評価され、地方と教育の文脈で注目を集めている。教育委員会に来て8年目で、最初の5年間は学校整備に携わり、残り3年間は学校と社会の接続を担当している。現在求められている学びについて考える中で、大きく2つの要素が重要だと感じている。

1つは、自己肯定感をどう高めるか。不登校の子どもの出席を認めることや、個別最適化された学びの推進もこの一環であり、学びの中で自己肯定感を育むことが求められている。

もう1つは、社会の中で生きた力をどう身につけるか。認知の方法や社会での表現力が求められ、これが「社会に開かれた学び」や「社会に開かれた学校」の必要性につながる。これら2つの要素に応えられる学びや学校が、今後、必要になると考えながら、今日の議論を聞いていた。

工藤：秋田の国際教養大学から来た。猿田さんとともに、人口約8,000人の五城目町で、人口減少が進む中で持続可能な町とは何かをテーマに取り組んでいる。

今日の話の中で「50年から100年後を想像する」というキーワードが印象に残った。長い時間軸をどう共有するかを考えると、それは2〜3世代間の価値観の共有や、異なる世代間の認識の違いをどうコミュニケーションするのかという問題につながる。

学校は、誰もが経験しているため、多くの人が多様な意見を持っている。しかし、世代ごとに学校のあり方の認識は異なり、その違いをどうつなぐかが課題になる。五城目町では「みんなの学校」というプロジェクトを通じて、この横のつながりをどう作るのかを模索している。

例えば、90名の中学生を地域社会に残すためには、彼らだけでなく、その親世代やさらに上の世代との価値観の共有が必要になる。次の2世代を考えれば、5世代にわたる価値観の共有が求められる。それをどう実現するかが大きな挑戦であり、イノベーションが必要な領域だと感じた。

霜村：昨日、探究活動の発表会「マイプロジェクト・アワード福島県大会」に参加した。運営には20代、30代の若者が関わっており、その中にふたば未来学園の卒業生もいた。開校から10年が経ち、卒業生が社会人として活躍する姿が見えてきて面白いと感じた。

マイプロジェクト・アワードは、生徒が探究活動を共有する場であり、卒業生が関わることで探究活動の発展や支援が加速しているように思う。卒業生が地域に関わり続けていることは、この地域に高校がある価値を示しており、その良さを改めて実感した。

佐々木一慧：高等教育機関の創設について考えてみたが、難しい言葉も多く、理解しきれない部分もあった。特に、設立後の展開がはっきり見えない点が気になっている。学校で学ぶ内容は、例えば英語ならグローバルに生きるために必要といったように、その後の展開が明確なものが多いと感じる。しかし、基金の話や教育機関全般については、その価値をしっかりと見出してから取り組まないと、せっかく設立しても十分に活用されないのではないかと考えながら話を聞いていた。

ゾエ：福島で新しい大学を作るには、まず地域の人たちの声をしっかりと聞き、一緒に作り上げることが大事だ。カリキュラムには、環境問題と人間社会の関わりを学ぶ授業があるとよいと考えられる。特に地元の環境に焦点を当てることで、地域の課題を身近に感じることができる。ジェンダーなどの社会問題や地域の歴史・文化を学ぶ授業も、コミュニティを支える力になるはずだと思う。

佐々木京香：東京生まれの東京育ちで、これまで与えられた環境や立場に甘んじて生きていていいのかという漠然とした思いがあった。そこから学生 NPO 法人で活動し、4 年生になってからは地域活性化や松岡先生の原子力の授業に関心を持ち、受講している。

NPO では人材育成に関わり、全国 25 大学の学生と交流してきたが、社会に貢献したいという思いがあっても、大学でそれを学び実践できる環境が十分でないと感じていた。そうした背景から、専門職大学の可能性を考える機会に関心を持ち、今回の議論に参加した。

昨日からの議論の中で、被災経験者の心の回復と、未来の若者を考えた創造的復興が対立するものではないにもかかわらず、うまく噛み合っていないと感じた。今回は未来の若者に焦点を当てた創造的復興を考える場だが、被災者の心の回復も忘れてはならない。両立のあり方を意識しながら、この機会を通じて考えていきたい。

本多：早稲田大学で所属している学科は社会環境工学科で、土木やまちづくりに関する学問を学んでいる。今回の話を聞いて、若い世代に必要な力として大きく 2 つ挙げられると考えた。

1 つは、今の社会で何が起きていて、それが自分にどう関わるのかを知る力。エネルギーや原発の話を含め、社会の課題を自分で見つけに行く姿勢が重要だと思う。課題を発見するプロセスがワクワクするものであれば、自然に関心を持ち、次の行動につながるのではないかな。

もう 1 つは、発見した課題にどう向き合うか。必ずしも解決が目的ではなく、解決に至る過程や研究自体にも価値がある。こうした姿勢は、ふたば未来学園が取り組んできたこととも重なるように感じた。

また、専門職大学の仕組みを活かせば、中高一貫の 6 年間で培った力をその先で活かす道が広がると考えている。自分の学科では 4 年生まで研究室が決まらず、基礎学問の学習が続くため、実際の仕事とのつながりをイメージしにくい学生も多い。就活の時期になって「自分は何がしたいのか」と迷うこともある。基礎を学びながら、実際の研究や実務に関わる人たちとつながる機会があれば、学びの解像度が高まり、自分の専門と社会の関係性をより明確にできると考えている。

司会：専門を深めるべきか、幅広い知識が必要か、大学での学びの在り方は難しい問題だ。資金の問題は大人が考えるとして、理想的な学校を作るなら、どんな学びの場なら人が集まるのかが鍵になる。副町長は「ここにいる人を逃がさない」と話していたが、それだけでなく全国や海外からも学びたいと思える魅力が必要だ。竹原・副町長は「ここにいる人を逃がさない」と話していたが、それだけでは不十分で、全国や海外からも学びたいと思われる魅力的な学校を作る必要がある。その理想を掲げ、今日の議論を深めていきたい。

菅波：学びの場を考える際、「誰が学ぶのか」という視点が気になっている。最先端の研究機関やエリート層の教育の話がある一方で、不登校や家庭環境に課題を抱える子どもたちが学びに接続し続ける仕組みが必要だと感じる。この地域に暮らしながら学校に行けない子どもたちが、社会とのつながりを失わずに学び続けられる場が求められるのではないかと。五城目の「みんなの学校」のように、学びの場がコミュニティの機能を持ち、福祉的な役割も果たせるような仕組みが考えられないかと思った。

また、工藤さんの「3世代での価値観共有」の話にも関連するが、大人が子どもの意見を聞く力をもっと鍛える必要があると感じる。対話の場を作っても、大人が子どもの意見を聞いたことで満足し、それを消費するだけになってしまうことがある。本来は、聞いた意見をどう活かしかうかが重要で、大人も子どもも共に育ち合う関係が理想だ。これは行政と住民の関係にも当てはまり、意見を聞いたものの、どう反映されたのかが住民に伝わらないまま終わることも多い。お互いに納得できる対話を成立させるためには、訓練が必要だと改めて感じた。

猿田：五城目町には小中学校しかなく、大学生や高校生がどのように学び、どんな意見を持っているのかを知る機会が少ない。今日の議論を聞き、高等教育機関に求められるものを考える上で、とても参考になった。普段、小中学生の意見を聞く立場からすると、子どもたちが求める学びに応えられる教育機関であることが重要だと感じている。

また、課題の見つけ方や地域との関係、高齢者と学ぶ若者との対立構造など、未来をどう共有するかが議論されていた。五城目町では住民参加型の対話を行った。例えば、コンクリートの学校を求める人と木造の学校を求める人は、一見対立しているように見える。しかし、対話を通じて「地震に強いからコンクリートがいい」「子どもが長時間過ごす空間だから木の温もりが必要」と、それぞれの意見の根底にある子どもへの思いが明らかになった。このように、学校や地域の未来を共有するためには、対話を通じた緩やかな共通認識を育む時間が不可欠だと改めて感じた。

工藤：霜村さんが話した「生徒や卒業生がまちで起きていることに関わる姿が見える」という点が重要なヒントになると感じた。秋田でまちづくりや人口減少地域の持続可能性を考えているが、それは単なる数の問題ではなく、どのような質のコミュニティを作るかが鍵だと思っている。この地域では「復興と地域再生」と「まちづくり」が同時進行しており、これを深く考えられる場所は世界でもここしかないと感じる。

復興や再生についての研究は蓄積されてきたが、一方で「まちづくり」とは何かを考えることも重要だ。まちづくりは、一度意味を失った空間に新たな時代に合った意味を与えることだと考えている。五城目町では空き家や空き店舗が増えているが、それを移住者や地域の人がリノベーションし、カフェやレス

トラン、アートスペースに変えている。人口が減っても「この空間がまちに必要」という価値を生み出すことがまちづくりの本質ではないか。このように、復興再生とまちづくりが並行して進む状況をカリキュラム化できる場所は、ここしかないのではないかと感じた。

霜村：探究が好きで、ふたば未来学園でも熱心に取り組んでいるが、高校生という立場では限界を感じることがある。大学があれば、地域と大学生が連携し、中高生も関わる機会が広がると考えている。しかし、ふたば未来学園では、未成年という制約もあり、探究が継続しにくいのが課題だ。また、探究の時間が増えると勉強時間が削られ、受験勉強との両立が難しくなる。結果として、「難関大学を目指すから探究は捨てる」という選択をする生徒も少なくない。この地域に大学を作るなら、カリキュラムだけでなく、入試のシステムも重要になると感じる。高校から大学へ、地域が変わっても探究を継続できる仕組みが必要だ。

また、6歳下の妹の学びをみて、小学校から英語やPC、探究活動が進んでいることに驚いた。教育は急速に進化しており、大学を作るなら高校生ではなく小学生を意識する必要があるのではないかと考えた。

さらに、探究活動では地域の人も教師であり生徒になれるのではないか。大学生が学ぶだけでなく、地域の人々が教え、学び合う場になれば、大学はより大きな可能性を持つと感じた。

佐々木一慧：1つ目は、グローバルな視点で地域を捉えること。京都や大阪、奈良には多くの外国人観光客が訪れるが、それは日本らしい文化があるからだと考えられる。しかし、同じような文化や歴史がある福島にはなぜ人が来ないのか。その理由は、世界とつながる発信の仕方や地域の捉え方が違うからではないかと感じている。今年の秋からフランスに留学する予定だが、地域の魅力を世界的な視点で発信することが重要だと思う。

2つ目は、災害からの復興について学ぶこと。以前読んだ「未来へつなぐ災害対策」という本に、災害は多様で地域ごとに異なり、決まった解決策を見つけるのが難しいと書かれていた。他の地域でも原発事故が起きているが、福島の廃炉や復興はまだ先が不透明な状況にある。このような課題に対して「こうすればいい」と明確な答えを出すのはほぼ不可能だが、過去の災害を学び、そこから学問として体系化することは、今後の復興や防災に役立つのではないかと考えている。

ゾエ：良い学びの場を作るためには、土壌を回復させたり、野菜を育てたりする実践的なプロジェクトが重要だと感じる。除染による土の問題も、土を「生き物」として扱うことで解決のヒントが見えてくるかもしれない。また、学生が地域の人々にインタビューや調査を行い、実際に何が必要かを知る授業も不可欠だと思う。

さらに、分かりやすい運営やしっかりした設備、学生食堂、小人数のクラス、参加型の授業、メンタルサポートが重要だと考える。平等な環境を作るための女性支援の仕組みや、ストレスを減らすための評価方法も必要だと思う。ベルギーには「シュタイナー学校」という、新しい学びの方法を取り入れた学校があり、参考になるかもしれない。

佐々木京香：大学4年生として、学びのあり方と大学に求める環境について考えている。また、記憶の継承を担う専門職大学が何を伝えるべきかについても話したい。

キーワードは「越境」。1つ目は、学科の枠を超えた学び。課題を自ら発見する力を養うには、異なる分野とのつながりが必要だと感じる。2つ目は、地域や企業との連携。大学が社会に開かれ、実践的な学びの場を増やすことが重要だと考えている。

また、福島の発信すべきこととして「心理的分断の可視化」がある。事故後の対立だけでなく、原発建設時から続く意思決定や感情の揺れを、アートを通じて表現することが有効ではないか。語り部の思いを引き継ぎ、地域と連携しながら学びをつなぐことが、大学の役割だと考えている。

本多：1つ目は、学部越境の重要性。自分も原発について学ぶ中で、土木の知識だけでは語れないことが多いと感じた。大学の特色を生かし、異なる分野の研究者と交流しながら、多角的に問題に向き合うことが大切だと思う。佐々木さんが触れたアートも、学問を超えて発信する手段として重要だと感じた。

2つ目は、防災を学問にする話に関連して、土壌の問題に興味を持った。大学の教授が「土質力学を小中学校で教えるべき」と話していたが、防災や土壌、処理水など、地域の課題を考える上で、全員が基本的な知識を持つことが大事だと思う。

また、学びの場としてシニア世代が大学に戻る話があったが、30代・40代の社会人にも学び直しの機会を広げるべきではないか。福島の廃炉問題に関わらなくても、地域の人々が大学

【グループ報告と討論】

司 会：井上 正（1F 地域塾・副塾頭、電力中央研究所・名誉研究アドバイザー）

グループ1：最初は専門職大学の話から始まったが、途中で議論は今後の社会のあり方まで発展した。結局、避けてきた原発問題などの後ろめたさを感じる課題に向き合い、そこから新たな問いを立てることが重要だという結論に至った。また、ふたば未来学園での総合的な探求の時間については、関心あるテーマを見つけた後、何が分かっていないのかを仮説設定する段階で、自分が考える社会のあり方と現実のギャップを意識させる点が印象である。今後の研究や自分の進むべき方向を考える上で、自分の軸がなければ機能しないと感じている。したがって、大学教育にも、個々が自らの研究軸を考える取り組みが必要だと個人的には思う。

グループ2：専門職大学の必要性と他大学との差別化について議論した。最初は、専門家を活用して生業と学びを結びつけ、地域企業への就職支援が専門職大学の強みであると論じられた。しかし、議論は次第に、学生がその仕組みを本当に求めているのかという疑問に発展した。最終的には、地元の人々との繋がりや、デスクトップリサーチでは得られないフィールドワークを通じた実践的な学びを強調し、それを発信することで、他地域からも選ばれる大学づくりが必要であるとの結論に至った。

グループ3：まず中学3年の佐々木さんが、再生塾などで原発問題に興味を持ち、フランスに行くことを決めた理由が紹介された。その後、班内で地域の人々が何を求めているか、また子どもたちを地域に

留めるために教育機関が本当に必要かといった議論が進んだ。福島ならではの原発や津波被害の経験、さらには福島の魅力や学びを活かし、地域内だけでなく外部の人々とも関わるができる教育のあり方を検討した。

グループ 4: 4 班では、意思決定の場の在り方について議論した。この大学設立を前提に、何を誰のために、誰に何を伝えるのか、つまり「誰のための大学なのか」という基本的な問いに立ち返る必要があると考えた。また、単に人を呼び込むための大学作りや人材の継承が本当に魅力的かどうか、住民のための大学であるならばどのようにコミュニケーションを取り、住民の声を反映すべきか、そして参加者全体で全ての視点を代表できないことから、含まれていない人々の意見を大切にすべきだという点についても検討した。

グループ 5: 5 班では、大学設立後に生まれる新たな価値や、地域の人々との繋がりの方について議論した。特に、パネリストの中で「広島メッセージ」が反戦の意志を明確に伝えているとの指摘が印象に残った。しかし、福島の場合、伝えるべきメッセージは単純ではなく、原発の影響で多くの人々が帰れなくなった悲劇と、原発がもたらした地域の潤いという、表裏一体の歴史があるため、一つのメッセージだけでは語り尽くせないという意見が出された。さらに、現在進行中の廃炉への動きも踏まえ、何を残し、何を伝えるかという点について、大学設立時にこうした議論をしっかりと行える環境づくりが重要であるとの結論に至った。

グループ 6: 専門職大学や日本の教育制度、探求の重要性、コミュニティのあり方について幅広く議論した。中でも「子供の意思を最優先にするべき」という点が印象的だった。ふたば未来学園が探求に力を入れている姿勢や、充実した環境が学びをのびのびさせると感じた。探求が子供の意欲に基づくものであるなら、卒業後にどこで学ぶかも子供自身が決めるべきだという意見があった。

私自身は関東圏で育ったため、故郷や土地との結びつきが薄かったのに対し、福島の生徒たちは地域との強い繋がりを実感していると感じている。こうした思いを育む学校は大変価値があると捉えている。また、「ここに残りたい」「また来たい」と思わせるような、人と人が繋がるコミュニティの形成も重要だと考えている。居場所や愛着といった要素が鍵になる。

グループ 7: 大学のあり方がまだ抽象的な段階にあるため、まずは具体的な内容や定義、概要といった基本的な立て付けについて議論した。班には国際教養大学の工藤さんが参加しており、AIU のようなリベラルアーツ重視の大学との比較も行われた。その中で、専門職大学に偏ると幅広い教養が欠ける可能性があることと認識し、専門性と一般教養のバランスをどう取るかが一つの論点となった。

また、専門性を追求するほどゴールが狭まる懸念から、高校生を対象とする大学として、彼らが進む道を限定せずに多様な学びを得られるよう、どのようなゴールを設定すべきかについても意見が交わされた。つまり、どのような教育の方向性とビジョンを持つかが、この大学の基本となるという認識が共有された。

グループ 8: 論点としては、高等教育機関の高等とは何か、専門性の定義、目的が単に定着を目指すのか、あるいは海外志向による人材の流出が問題なのか、さらに「福島でしか学べない魅力」とは何か、

という点が挙げられた。こうした論点をしっかりと議論し、中身を詰めることが重要であると感じている。その際、上から理想を押し付けるのではなく、福島を含む学生たちの意見や考えをしっかりと汲み取りながら、皆で協力して内容を充実させることで、単一の視点に偏らない学校づくりが実現できたと考えている。

司会：皆さんの意見を聞く中で、専門職大学という名前はあるが中身が不明瞭で、詳細が分かってから意見を出したいという声があった。子供の意思や、ふるさとへの愛着の違いも議論に影響していると感じた。これまで社会科学的な視点や社会とのつながりが語られてきた中で、今回は地域塾から具体的な提案が出されたが、それをどう受け止めているか、一般参加者やメディアの意見も聞きたい。

西尾：対話や討論の場は、事実を知り意見を交換する上で非常に重要だと感じた。取材で忙しい中でも、こうした会の継続には大きな意義があると認識している。大学については、防災・環境・エネルギーなどの分野を強みとして打ち出せば、福島県内に限らず県外や海外にも発信力を持てると感じた。そのためには、明確なビジョンを示すリーダーシップとともに、資金や政治的支援といった実現に必要な具体的要素が不可欠だと考えている。

さらに、ここで学ぶ学生が「東京に行きたい」「世界に出たい」と考える場合でも、その挑戦を応援する奨学金制度や仕組みを整えることで、将来的にふるさとへの恩返しにもつながるはず。主体的な学びを地域全体で支え、育てていく教育環境が必要だと考えている。

寺本：本日初めて福島を訪れ、この会に参加した。伝承館から海岸沿いまで移動しながら、福島ならではの風景と魅力を感じた。寒さの中で見た美しい海沿いの景色は、単に美しいだけでなく、原発事故という歴史の重みが重なって見え、強く心に残った。この土地は、和辻哲郎の「風土」という概念——自然と人間文化が融合して生まれるもの——を体現していると感じた。豊かな自然、エネルギーのための努力、そしてそれに伴う悲劇が一体となっているこの場所を、初めて訪れた自分でも深い学びの場として実感できた。このような濃密な学びが得られる福島の風土を直に体験できたことは、ここに新たな学びの場が生まれる意義の大きさを改めて認識させるものだった。

溝上：今年8月に燃料デブリの試験的取り出しを開始し、初期の並べ方のミスなどの課題を経て、11月に完了した。燃料デブリの取り出しは廃炉作業の中でも最も難しい工程であり、今後も皆様に見守っていただきたいと考えている。

また、今年の初めには1号機の格納機内にドローンを飛ばし、内部の状況を確認して、これからの廃炉作業に向けた情報を得る取り組みも実施された。これを主導したのは福島第一の立地町出身の若者で、地元人材の活躍に今後も期待している。専門職大学との連携についてはまだ不透明な部分もあるが、事故という現実を踏まえた上で、地元から世界で活躍できる人材を育てる可能性もある。こうした視点も含め、今後の人材育成を検討していきたい。

竹原：学生との対話を通じて専門職大学について多くの学びを得た。「何が必要か」という問い以上に、魅力的な学びの場をつくるには学生との対話が不可欠だと実感した。正直、まだ未熟な点も多いと感じている。

また、東京電力の方の発言にもあったように、私たちは地元貢献する人材を輩出したいという思いがある。そのため、まずは富岡町で学生の意見をじっくり聞き、来年度にその取り組みが実現できるかどうかを模索し、さらに1年後に具体的な方向性を固めていく予定である。

林：専門職大学についてグループ内で話し合った際、先進事例として兵庫の取り組みが挙げられ、その成功を支えているのが国際アートセンターだと感じた。そこで、専門職大学を作る際には、対となる存在として F-REI が重要な役割を果たすのではないかと考えている。F-REI がしっかり機能するよう、こちらからも積極的に働きかけていく必要があると思う。

崎田：ロードマップの議論は夢物語ではなく、本気で実現を目指すという共有の意思を示すものとして行われた。1年前から議論を重ね、今回の討論で「どんな大学を望むか」「地域の人々と話し合う重要性」が改めて確認された。特に地域住民、避難中でまだ戻っていない人も含め、先に提案したコミュニティ基金のような仕組みを作り、住民と一緒に話し合い、関わっていると実感できる場を整えることが求められると感じた。また、広野町や遠藤町の町長など多様な関係者と連携することで、実現の可能性が高まると考えている。こうした視点を踏まえ、今後も対話を重ねて具体的な道筋をつくっていきたい。

平岡：経済産業省で原子力の安全規制に携わっており、原発事故の経験から強い反省の思いを持っている。退職後も福島の子孫の将来を見届けるために、こうした場に参加してきた。本日の学生たちの力強く情熱的な発言に、未来への希望を感じた。高等教育機関の話題には少し距離を感じたが、議論を通じて大きな可能性を実感できた。今後、困難もあると思うが、この場で一步一步議論を進め、実現に向けて取り組んでいきたいと強く感じている。

小磯：「村を捨てる教育」になる懸念はあるが、それも個々の関心に従って故郷を離れ、自分の道を選ぶ一つの形だと捉えている。しかし、その一方で、地元で専門職大学や専門学校が存在すれば、より豊かな選択肢が広がり、地域に根ざした学びを選ぶ道も確保されるはずだ。

また、生徒というのは、大人の意向通りには動かず、予想外の行動に出ることが常だ。時には既存の枠組みを悪い方向へ逸脱することもある。逆に大きな可能性を秘めた行動で好意的な結果をもたらすこともある。高校や大学を卒業した後、単に「頑張れ」と声をかけるだけでは不十分で、選択肢が多岐に渡る環境が、個々の才能をより豊かに引き出すと考えている。そういった意味で、地元で根差した専門職大学の存在は、非常にありがたいものだと感じている。

井上：基本的に、事故から14年が経過し、1Fの処理や中間貯蔵施設、土壌問題など、今後も長い年月を要する課題が山積している。一方で、事故から10年を過ぎた今、事故そのものを知らない世代も出てきており、次世代・次々世代へと引き継ぐべき課題であるにもかかわらず、関心は薄れつつある。復興を語るには地域住民の視点が不可欠であり、地域の現状や未来を担う教育機関の存在が大きな役割を果たすと考えている。例えば、ふたば未来学園や専門職大学などの設立が進み、福島の復興のバトンが次の世代へ持続的に継承されることを願っている。

付記:

ふくしま学(楽)会・参加者へのお礼メール (2025/1/28, 12:02, 松岡→リサーチセンター関係者)

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

第15回ふくしま学(楽)会・第3回福島再生塾 関係の皆様 (BCCで幅広にお送りしています)

CC: 事務局・Linさん

1月26日(日)13:15-17:55、福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校・会場+オンラインで開催した第15回ふくしま学(楽)会・第3回福島再生塾には、会場参加66名、オンライン参加23名、合計89名の多くの皆さんにご参加いただき、誠にありがとうございます。

第15回ふくしま学(楽)会・第3回福島再生塾では、「福島復興の過去・現在・未来:我々は何処から来たのか、我々は何者か、我々は何処へ行くのか」をテーマに、福島再生塾が取り組んでいる以下の3つのプロジェクトに焦点を当て、4時間40分の長時間の報告・議論・対話を行いました。

1. 福島原子力災害の記憶と教訓の継承と発展を担う高等教育機関の設立
2. 浜通りの里山再生を目指した浪江町・津島地区の住民参加型環境アセスメント事業の実施
3. 2050年の自律的・持続的な浜通り地域社会の形成を支援する福島再生基金の創設

2011年3月の東日本大震災・福島原発事故から14年を迎えるにあたり、福島原子力災害の記憶と教訓を継承し、福島の復興と廃炉の取り組みを世界へ発信する「新たな高等教育機関の創設」の必要性について、世代を越え、分野を越え、地域を越えて、対話することができました。

特に、福島原子力災害の集合的記憶や社会的教訓を形成する「学びの場」づくり「社会的仕組み」づくり(0才から125才までの「みんなの学校」づくり)の重要性について、広く深く考えることができました。

昨日(1/27)は、秋田県から参加いただいた工藤尚悟さん(国際教養大学)と猿田和孝さん(秋田県五城目町教育委員会)と、大熊町の学び舎ゆめの森(南郷市兵・校長と懇談)、富岡町の東京電力廃炉資料館、広野町の福島県立ふたば未来学園(小磯匡大・教諭、カタリバの横山和毅さん)などを訪問しました。

富岡町のさくらモールでは、偶然、とみおかプラスの香中峰秋・事務局長にお会いし、双葉郡8町村が長期的・広域的な視野で「まちづくり」に取り組むことの必要性や高等教育機関の重要性などについて議論しました。

なお、第15回ふくしま学(楽)会・第3回福島再生塾のオープニング・アドレスで紹介しましたが、1/27発売の雑誌『AERA』2月3日号の「福島第一原発 燃料デブリ取り出したのは12億分の1」に、私のインタビュー記事「廃炉完了『170年でも楽観的』」が掲載されました。記事PDFをお送りします

ので、ご一読ください。雑誌記事ですので、「取扱い注意」をお願いします。

いよいよ早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター事業の活動期間は、あと1年間となりました。

14年かけて、ようやく5合目か6合目のベースキャンプに到達できたように思います。ベースキャンプから上を見ると、濃い霧の切れ間に頂上が見える時もあるように思います。

山登りにおいてベースキャンプまでの登り方と頂上アタックの登り方は全く異なります。

これからの頂上アタックの登り方をどのようにすれば良いのか？関係の皆さんと対話を続け、広く深く考えたいと思います。

引き続きよろしくお願いします。

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター
センター長 松岡 俊二

以上